

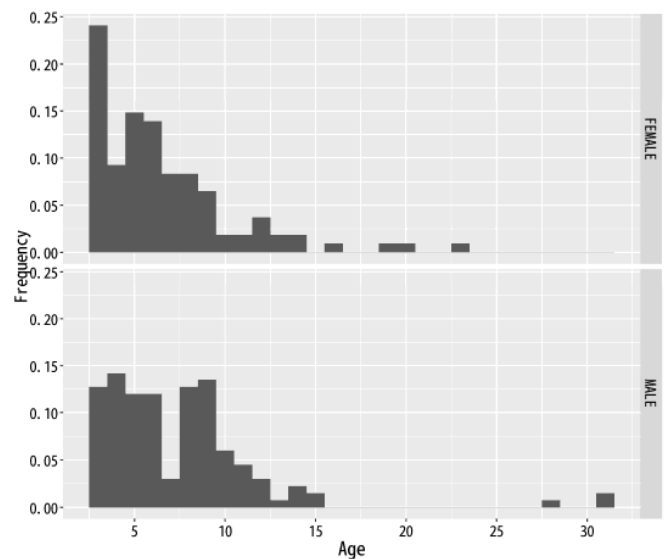
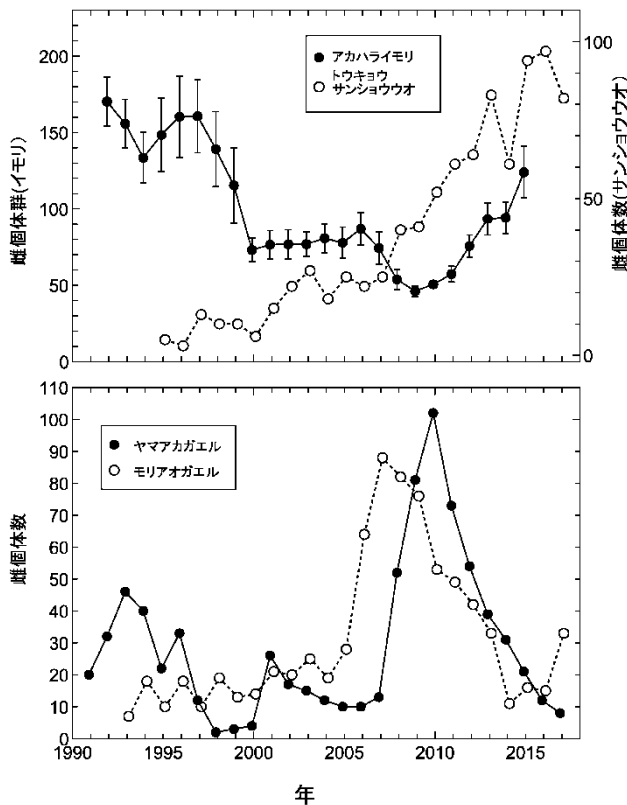


南大沢におけるアカハライモリの生態： 長期モニタリングから分かってきたこと

草野 保

1991 年春に都立大学が南大沢キャンパスに移転して以来、キャンパス内緑地にあるイモリ池にて両生類の繁殖活動のモニタリングを行ってきた。アカハライモリ (*Cynops pyrrhogaster*) はこのイモリ池の主であり、一年中水中で姿を観察できる唯一の種である。4 月から 11 月まで月 1 回夜間センサスを行い、捕獲個体は当初指切り法や腹の模様で個体識別を行ったが、2010 年からは PIT タグによる個体識別を行っている。現在までに約 1,700 頭を捕獲し標識した。年ごとに捕獲歴データをまとめ、開放個体群モデルである Cormack-Jolly-Seber 法により個体数を推定した結果、1990 年代は雌雄とも 150~200 頭で安定していたが、後半に急激に個体数が激減し半減した。その後ゆるやかな回復傾向が見られたが、2000 年代半ばにウシガエル (*Lithobates catesbeianus*) が侵入し再び個体数は減少した。幸

いウシガエル駆除により徐々に再回復の兆しが見られている。現在は雌雄とも 100~150 頭程度と推定される。個体数の他、標識再捕調査で得られたデータにより、年齢構造・生残過程・個体の成長や栄養条件などの長期的な傾向も解析することができた。今回の講演では、このような長期的なモニタリング調査により分かってきた話題の一部を紹介したい。



図：アカハライモリ成体の年齢構成（2017 年）

図：イモリ池の両生類の個体群サイズの年変動